

花き流通標準化検討会（第2回）概要

1. 日時：

令和4年11月30日(水) 15:30～16:50

2. 場所：

農林水産省 第3特別会議室（一部、オンライン参加）

3. 出席者：

<卸売業者>

福永 哲也	豊明花き（株）	代表取締役社長
田嶋 久嗣	札幌花き園芸（株）	代表取締役社長
中嶋 強	（株）仙花	代表取締役社長
林 悦孝	（株）名港フラワブリッジ	代表取締役社長
大西 常裕	（株）なにわ花いちば	代表取締役社長

<行政>

武田 祐紀	農林水産省 大臣官房新事業・食品産業部食品流通課長
丹菊 直子	農林水産省 大臣官房新事業・食品産業部食品流通課 卸売市場室長

<オブザーバー>

前田 安正	一般社団法人日本花き卸売市場協会	常務理事
真鍋 光裕	一般社団法人日本花き生産協会	流通委員会委員長
小河 義徳	全国農業協同組合連合会 園芸部	次長
小島 直康	全国農業協同組合連合会埼玉県本部	花植木事務所 所長
赤上 信弥	公益社団法人全日本トラック協会	常任理事
北川 真光	愛知県経済農業協同組合連合会 園芸部花き課	課長
桐生 進	株式会社大田花き花の生活研究所	所長
高橋 央佳	JA 愛知みなみ 渥美スプレーマム出荷連合	監事
小野 和洋	国土交通省総合政策局物流政策課	主査
福島 慎也	経済産業省商務・サービスグループ物流企画室	係長

4. 議事概要：

<行政から花き流通標準化について（資料3）について説明後、花きの流通標準化に向けた今後の取組について意見交換>

【各構成員からの主な意見】

○以下、構成員からの主な発言。

1. 総論

- ・市場協会での検討から時間も経ち、また第1回目の検討会の開催以降にも、産地から切り花の規格変更について提案があるなど、新たな動きがある。今後も規格変更の提案がある可能性も考えられるので、ガイドラインはきっちり決めるのではなく、方向性に留めて柔軟に対応できるように

した方がよい。

- ・標準化はガチガチに決めないで柔軟に対応できるようにした方がよい。
- ・実現が困難なものを標準化にしても絵空事になるので、実現できるものを標準化することが大事であり例外は当然ある。
- ・2024年問題があり、それ以降に取り組まなければ問題もあるが、現在やらなければいけないことから協会として会員と共に取り組みたい。
- ・花きの輸送は非常に課題が多い。2024年問題の改善告示により労使で合意を行って現在関係者に周知を行っているところであるが、労働時間の規制により地方から首都圏への輸送能力が落ちてしまうと考えている。JAの使用している箱のサイズは様々で効率的な輸送ができない。出荷量の増減もあるし、荷待ちに要する時間も長い。秋田県内の某農協では多機能型の低温倉庫を整備しており、前日には出荷数量が確定しているので、是非、他のJAも導入してもらいたい。
- ・宮崎県の現地でお話を伺ったところ、2024年問題は認識しており、山間部では集荷のトラックの確保が難しくなっているなど課題を抱えている。今後、産地の問題点などを収集しながら議論を進めていければと考えている。

2. 台車

- ・切り花はパレット、鉢物は台車という分け方ではなく、切り花でも状況に応じて台車を使用している実態があるので、状況によってフルとハーフを使い分けることを標準とすべき。

3. パレット

- ・現状市場ではプラスチックパレットの他にも木製パレットが散見され、パレット化については、同時に木製パレットの廃棄処理等管理の仕方についても考えておく必要がある。
- ・生産者は、フォークリフトを所有していないのでパレット化を導入するのは困難であり、生産者から先のどの時点からパレット化するか、又は台車に乗せるのかを明らかにすべきである。
- ・県内の切り花の出荷はべた積みであり、2024年問題に向けてパレット化は重要であると感じているが、パレット化するには箱サイズの統一化が必要であり、統一のためには実需者から同意をとって取り組むことが必要なので進めたい。

4. 外装サイズ

- ・小売からの要望を受けて販売ロットを細かくした経緯があるため100本箱の導入は厳しいとのことだが、それでは段ボール数も増えるし生産者の負担が増えることになる。産地の持続性のためにも将来的な視野で生産者の負担軽減のことを作業部会で議論してもらいたいとの思いから第1回検討会で話したところ。
- ・私の市場では100本箱が主流であり市場内で小分けを行っている。産地ではどのようなサイズの箱かを選び、その中に何を入れるか判断している。
- ・箱のサイズは、まずは生産者の負担軽減の視点で考えることが必要であり、

卸売市場側は小分けなど工夫すれば何とか対応できると考えている。

- ・ 100本箱にどう詰めるかも工夫次第でなんとかなる。例えば、カーネーションは頭をずらして段々に入れて4段にできる。110cmの箱に80cmのものを詰められるので、普段から工夫すればできる事例である。
- ・ 花屋からカーネーションは65cmの長さがあれば見た目が良く、65cmあればそこから下を切って筒の中に入れられるとの話を受けていることから、産地ではそれに対応するようにしており、生産者によって幅があるが80～75cmのカーネーションを90cmの箱サイズを詰め込んでいる。
- ・ 産地では、外装費の値上げ、物流費の値上げで生産費が増加している状況のため、再生産費を確保し、産地側にもメリットのあるガイドラインにできればと感じている。
- ・ 1年前の12月から、輸入のスプレーマムのスタンダードの75cmよりも5cm短い70cmで出荷しているが、80～90cmのものと比較しても値段で差はつけられていないことを実証しており、工夫すれば何とかなるので、生産者も流通標準化の中で変革が求められていると感じている。
- ・ 箱については、長さは最大をとればいいが、箱は積み上げるので高さをどうするかが問題だ。

5. コード・情報

- ・ コードは揃えて行く必要がある。JFコードは戸籍的な位置付にできるが、即時発番には課題があるため、商品コードと紐付けしながら流通や販売の際に使用していくことでデジタル化に結び付いていくことが必要。
- ・ 遠隔産地では通信環境が良くないので、DX化を目指すのであれば、通信環境の整備も支援するようにしてもらいたい。
- ・ ある生産者の話によると、近いうちにコンピューターを入れ替える計画があるが、今後3～4年もかけてコードの統一化をしたのでは遅いので早く整備してもらいたいとのことであった。
- ・ 北海道では、花きを専門にやっている生産者は少なく、夏場だけの選果場のためコンピューターを整備しているところが少ない。手書き伝票も多いことから、コンピューターの整備に向けてJAに対する支援をお願いしたい。
- ・ 秋田県の先進的なJAでは入荷と共にタブレット端末で配荷を行っているので迅速な事務処理を行っている。
- ・ 卸売業者ごとに使用しているコードは異なっているため紐付けを行っているが、共通コードとするのであればJFコードが候補になると考えている。
- ・ 各市場で、品種・品名に応じてコードが設定されている。これを統一してもらいたいというのが生産者の意見だ。
- ・ 今後労働力不足がさらに進む中ではデジタル化をしないと厳しいと感じており、必要な項目を整理して統一コードにできれば産地から市場まで一気通貫で使用でき、業務の効率化と共に付加価値が得られ、生産者の所得向上につながるのではないかと感じている。

- ・県内 JA のコードの使用状況を見てもバラバラであり、今後市場とのやり取りの中で統一していきたい。JF コードは使用できるのであればそれにこしたことはない。
- ・コードについては、生産者が卸売業者 5 社に出荷する場合、1 回コードを入力すれば、次回からは手間ではない。デジタル化は四角四面ではなく実は柔軟なところもある。
- ・本日の議論の中で言及のあったデータの標準化の関係で、10月24日に内閣府戦略的イノベーション創造プログラム（SIP）第2期スマート物流サービスにて「物流情報標準ガイドライン」が ver2.00 に更新されたので参考にさせていただきたい。

(以上)